

エレーン・ファインシュタイン『国境』¹

榎本眞理子

1. はじめに

科学者インゲ・ヴェンドラーとその夫で詩人・劇作家のハンスは、ウィーンに住むユダヤ人である。エレーン・ファインシュタインの『国境』はこの二人のウィーンからパリ、そしてスペイン国境の町ポル・ボウへの逃避行を描いている。「人は他人を犠牲にすることなしに生きられるか」という本書のテーマは、ヴェンドラー夫妻の関係の在り方を通じて描き出されるとともに、ナチスのユダヤ人迫害という重いテーマとも重ね合わせられている。

この作品の背景には、女の生き方が歴史とも深いかわりがあるという認識がある。現実には我々が歴史の中に生きているという意味と、その本質のメカニズム（つまりナチスの精神構造と、愛情嗜癖的な人間関係は、他者を手段と化してしまっている点で共通）ということと、二重の意味である。ハンスは女たらしで、女の称賛によって自我を支えている。しかしインゲにも問題がある。彼女は健全な自己肯定感を持たず、他人の評価をととても気にしている。小説の最後になって、インゲは自分がハンスの支えを必要とするあまり、精神的に彼を犠牲にしてしまっていたということを認める。男の方も女に存在感を与えるための手段と化していたということになる。18世紀以来のロマンティック・ラブの幻想にからめとられたままナチスドイツのユダヤ人迫害という歴史の波に翻弄され、ヴェンドラー夫妻は相互に傷つけ合い、彼らの魂は病んでいくのである。

小説の中心をなすのは1938年1月から1939年5月にかけての、主要な三人

— イング、ハンス、そしてハンスの恋人ヒルデ — による日記と手紙である。また第一部と第五部は主要部分（第二部から第四部）を囲む枠構造となっている。それは1983年の「現在」の、インゲの亡命先のシドニーでの、彼女と孫息子サウルとの会話からなる。そして第六部として、サウルが英訳したとおぼしきハンスの詩が収録されている。

この小説中にはベンヤミンも登場し、小説世界を奥行きのあるものとしている。その死の前後の状況は史実そのままである。² 本稿では『国境』の理解の一助として、これに似たテーマを扱っているファインシュタインの『母の娘』、及び『ブレヒトを愛して』にも触れて行く。

ところで『国境』でファインシュタインが様々な語りを採用していることは、この作品全体のテーマと密接に関連している。そのことが、この作品に様々な形で影響しているベンヤミンの歴史認識を参照することではっきりと分かってくる。彼の歴史観については5でふれるが、ここではベンヤミンについて簡単に紹介しておこう。ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）はユダヤ系ドイツ人である。彼は文学者、哲学者にして社会学者であり、繊細で緻密な散文詩にも似た文で、様々な評論を書き残した。彼の残した多岐にわたる論文は1955年に著作選集が刊行されてから広く読まれるようになり、「とりわけ世界が危機の様相をさらに深め、従来の諸理論の手詰まりがあらわとなった60年代末以後に、その名声は世界全域に及んだ」（平凡社大百科事典）のである。ベンヤミンの仕事の中心をなすものは、「19世紀資本主義とそれが作りだした物象化のメカニズムの分析」であり、それはまた「そうした物象化のはての破局、すなわち危機の飽和状態が救済への転換点ともなるという歴史観ともつながっていく」ものである。（高橋 121）

次に当時の歴史的状況を簡単に説明しよう。（村瀬 348-372、201-211）ナチ政権は1933年に成立した。翌年にはヒトラーが総統となり、反ユダヤ立法が続々と作られた。1938年の1、2月には戦争に批判的な幹部が一掃され、またヒトラーは全ヨーロッパのユダヤ人を排斥する決意を固めた。ハンスが、旧友の息子で彼の授業に出席していたカートに「この国から出て行け」と言われたり、学生達に手ひどく反発されたのもこのころである。この年3月にはオーストリアがドイツに併合され、その頃からウィーンにおけるユダヤ人への暴

行などが頻発するようになった。5月末にはオーストリアに「職業公務員法」が導入され、混血ユダヤ人や、ユダヤ人と婚姻関係にあるオーストリア人も公務員の地位を追われた。全国的なユダヤ人の大迫害の起こった「水晶の夜」はこの年の11月9日から11日にかけてである。インゲとハンスはこの年の9月にはパリに移っている。従って彼らは「水晶の夜」は経験せずすんだことになる。翌39年の1月末には議会においてヒトラーが声を大にしてユダヤ人の絶滅を宣言した。ドイツは3月にはチェコを占領、9月にはワルシャワに突入した。また40年6月にはフランスと休戦協定を結び、フランスの3/5を支配下に収めた。ベンヤミンが自ら命を断ったのはその年の9月26日のことであった。ハンスもその後まもなく命を落としたことになる。またソ連では36年頃から始まった大粛清が39年になってもまだ行われていた。ユダヤ人を初めとする非ロシア諸民族への粛清も大変厳しく、外国人は勿論のこと、外国に行った経験のあるものもスパイ容疑で大量に逮捕された。「フランスのスパイ」容疑によるヒルデの逮捕もこのようなものの一つであったと考えられる。

『国境』の第一部は1983年のシドニーである。アメリカに渡ったフレデリックの息子サウルはオクスフォード大学で歴史の勉強をしている。彼は祖母であるインゲの話聞きにわざわざ彼女の住むシドニーまで話を聞きに来たのだ。サウルがベンヤミンに会ったことはあるか、と問う。インゲは彼の求めに応じてハンスの日記など、当時の文書を見せてやるのだった。

2. ユダヤ人であること、女であること

女であることとユダヤ人であることを、『ブレヒトを愛して』のヒロイン、フリーダははっきりと結び付けている。「ユダヤ人は長いこと虐待されてきたが、滅亡しなかった。とてもタフに違いない」と言うブレヒトに対し、フリーダは「女もそうよ」と答える。「というのも私は自分の中のその二つの要素を結び付けて考えるようになっていたのだ」(37)と続けてフリーダは説明している。

ユダヤ人迫害の歴史は古く、錯綜していてその解説は筆者の手に余る。ここではナチスドイツのユダヤ人絶滅政策に直接かかわる、人種論的な近代反ユダヤ主義についてのみごく簡単に触れよう。

反ユダヤ主義（反セム主義）理論は、要するに、近代社会そのものに対するこれら〔伝統に生きる、小商人、職人、農民などの旧式中産階級〕の社会層の不満と憎悪とを、対象をユダヤ人だけにしばって爆発させたものであった。

…深く固い共同体へのあこがれと、自分の生命を強固な基礎の上のうちたてたいという願望、それに近代社会への絶望が人種理論を生み出したのであり、この人種理論こそが近代反ユダヤ主義を恐ろしい性格のものに仕立て上げたのであった。（村瀬 382-3）

これら人種理論の基礎はフランスのゴビノー伯の『人類の人種の不平等性について』である。また1881年に出た『人種、道徳および文化問題としてのユダヤ人問題』でオイゲン＝デューリングは次のように書いている。「劣等な民族は、僧侶や教育者がいかに教化に努力してみても本来の性格を変えはしない。…ユダヤ人は、ただ他の民族の成果や文化を盗み、搾り取るだけであって、自分自身は創造能力がない。彼らは好んで腐敗した環境に住みつ়く寄生生物である。」（村瀬 384）

またヒトラーは『わが闘争』の中で「大衆は女のようなものだ。自分を支配してくれるものの出現を待っているだけで、自由をあたえられても、とまどうだけだ」と言っている。ユダヤ人はユダヤ人であるという、その一点において非難され、抑圧される。女もまたしかりである。ファインシュタインの作品の中では、反ユダヤ主義者のユダヤ人への差別意識は、女性差別論者の女性蔑視とほぼ平行なものとして扱われている。ユダヤ人がスケープゴートになっているように、女は男の自我を支える捨て石の役をしばしば振り当てられることを、ファインシュタインは繰り返し描いているのである。「恋愛結婚」が新しいイデオロギーとして登場して来たのは18世紀のことだが、女はその頃から大して変わっていない。「恋愛結婚」は一方で女を解放したが、他方心の中にもぐりこみ、男への隷属を絶対とする生き方を女に強いることとなった。ファインシュタインはそのような縛られた女の姿を描き、そして自縛状態からの解放へと読者を誘うのである。

『国境』、『母の娘』、『ブレヒトを愛して』のいずれにおいても、強烈な存在

感を持ち、魅力的で、複数の女をひきつける男が登場する。『母の娘』では父、そしてヒロインの夫となるジャノスという10歳近く年上の男、『ブレヒトを愛して』ではブレヒト、そして『国境』ではハンスがそれに当たる。

たとえば『母の娘』では子供時代のハリーナは父を心から崇拜し、影の薄い母を軽蔑していた。長じて昔からの知り合いで、ケンブリッジ大学の講師を勤めるジャノスと結婚した。ハリーナは夫を崇拜する。しかし夫はハリーナを馬鹿にし、それでいて彼女から精神的エネルギーを吸い取り続ける。かくしてハリーナは彼女の嫌っていた自分の母そっくりになってしまう。劇場のロビーで倒れそうになったハリーナに手をさしのべ、支えてくれたのは父でも夫でもなく見知らぬ女の人であった、というエピソードは象徴的である。父が女をくいものに生き延びて行く、ならずものであったこと、それを母が見抜いていたこと、また母が身の危険も顧みず同胞を助ける立派な女性であったことも、のちに夫の口から知らされる。

一方『ブレヒトを愛して』のフリーダは愛する男との距離の取り方を知っている。孤独の認識は自由を保障する。彼女はブレヒトを愛しつつも、ほぼ終始一貫して自由であり、ひとりである。そしてそれを楽しんでいる。そのことをブレヒトは「君はいつも僕に不実だった」と表現する。

『国境』に話を戻そう。『国境』の第二部の舞台はウィーン、時は1938年1月である。授業でどもってしまい、「倫理学」の講義を二回もキャンセルせざるをえなくなったハンスが、精神分析医にすすめられてつけ始めた日記からそれはなる。「インゲは私には興味もなくしている。夜中にしがみつくと湯たんぽがわりとして以外は」とハンスは自嘲気味に日記に書きつける。それに詩を評価する人などいない時代状況であることも、詩人ハンスにとっては悩みの種だ。こうして自信をなくし、妻ともうまく行っていなかったある日、ハンスは若い女性とほぼ笑み交わし、恋に落ちる。その女性ヒルデはインゲと違ってハンスの話をまともに聞き、苦しみに共感し、講義の原稿朗読にうっとり耳を傾けてくれる。

一方ハンスの旧友（その妻は昔ハンスの恋人だった）の息子カートがハンスの授業に現れる。ハンスは初め自尊心をくすぐられる。しかしカートはハンスの吃音を笑い、次第に学生の中にハンスへの反感をあおって行く。思い余って

カートを呼び出したハンスに、カートは「あなたたちは我々の国を汚している。この国から出て行ってくれ」と言う。次第に状況は悪化し、インゲはパリに逃げようともちかけ、ハンスの精神分析医でさえ乞食に身をやつして逃げ去って行く。

入念に準備をし、今度こそはと自信を持ってレクチャーを始めたハンス。しかし「聞こえない人は手を挙げるように」と言い、スピノザからの引用を読み終えて目を上げたハンスの見たものは、教室の最前列を含むほとんどすべての学生の手が、ナチス風の敬礼よろしく林立している悪夢のような光景だった。その学生の中にカートがいて、そのカートの手が彼の前の列に座っているヒルデにふれたように思った次の瞬間ハンスは気を失う。

簡単なメモを一つ残しただけでヒルデはパリに去る。失意の中でインゲとスイスに出かけたハンスは、自分がいかにインゲを深く愛し、必要としているかを認識するのであった。しかし帰宅してヒルデの手紙を見つけたハンスはさっそく手紙に読みふける…。

ハンスとインゲの結び付きは、今の言葉で言うとアダルト・チャイルド同士のそれに近い。二人は自分の存在感を人に頼り、人に必要とされることに精神安定の基礎をおいてしまっている。「守ってやる相手がほしい、かわいげのある人が。そんな人なら病人だって構わない」とはハンスの弁である。インゲはもっと愛情嗜癖の度合いが甚だしい。「自分より富裕な家の出で、美しいインゲがなぜ自分を選んだのかと言えば、それは私がインゲの助けを必要とする男だったからだろう」とハンスは言う。インゲは科学者であり、因果律の世界に住んでいる。ハンスの非論理的な言い分など簡単に論破してしまい、「しょっちゅう間違っているくせに、インゲはなぜいつもあれほどまでも自信満々なのだろう」とハンスを嘆かせるほどである。そのインゲの自信と活力のもととなっているのは、実はハンスに認められたいという思いなのだ。それでいてインゲは文学を科学より低く見ているし、「詩は分からない」とハンスの詩を理解することを拒否する。

3. 愛という病、または共依存

健全な自己肯定感がないために、他人に認められることで辛うじて存在感を

持つ女。男が認めてくれないと、自分は何者でもないと思ってしまう女。このような女性と他人との関係は、真の愛情（親密性）ではなく共依存となってしまう。

共依存について斎藤学の『「家族」という名の孤独』から紹介しよう。³

〔共依存者は〕自己と他者との区別が曖昧な世界観のもとで暮らしているために…他人の感情と自分の感情とをはっきり区別することができないという自己中心性の病理を抱えている。…精神的に未発達な幼児が、周囲に起こる事件のすべてに自分の責任を感じてしまうように、成人の共依存者は周囲の情緒的雰囲気呑み込まれて暮らしている。結果として、彼らは嫉妬深い。自分の愛する者が自分以外の者に惹かれるとき、彼らはそれを受入れることができない。他人がもう一人の他人に感じる感情を自己の感情と切り離せないために、愛する者が自分以外の者を愛すると、もう自分を大事にしてくれないかのように感じてしまう。このことが、共依存者の他人への支配意欲を強める。(199)

この共依存に似た感じが多かれ少なかれインゲのみならずハンスにもある。また中年の危機や、長年にわたる夫婦のすれ違いの積み重ねもある。父＝男が認めてくれることを求め続ける女たち。その一方で女の精神的エネルギーを吸い取る「吸血鬼」のごとき男たち。ここでは愛は病気のようなものである。自分の存在感を全面的に人に頼り、その上に成り立つ愛は病んだ愛であり、他人を手段におとしめてしまう愛だ。それから抜け出すには内的な強さと、他人、ことに男の精神的なサポートなどなくとも満ち足りていられる、健全な自己肯定感が必要である。

自分たち夫婦は「親友であり、あまりにも似ていて兄妹のようで、我々の間柄は近親姦的だ」とハンスは言う。この点、インゲはベンヤミンが愛した三人の女性のうちの一人、ユーラ・コーンを思わせる。ユーラは思考法から容貌にいたるまで、ベンヤミンによく似ていたということである。(野村 151-153) またインゲとハンスはともにアウトサイダー（「詩人」と「女」）であることで結び付いた、ことにインゲは「自分が手を差し伸べてやれる相手を意識的に」

選んだのである。さらにインゲの愛の強さがハンスをとらえたこと、二人が相互に依存しあってきたことが語られる。

気持ちがすれ違うようになってしまった中年の夫婦。妻の姿を戯画化して作品に描き続ける夫。自分の仕事と自分の世界を持ち、夫の心の支えとなってくれない妻。どもってしまっただけで講義ができないという危機に見舞われた夫。妻は夫の抱えている問題を知ろうとすらしめない。そんな中、夫は若い娘と恋に落ち、自信を取り戻す。そうなってみて初めて妻は夫への愛を自覚する。「私は実はハンスに認めてもらいたくて仕事をしてきたのだ」と。皮肉にも、ちょうどその頃妻は仕事をやめたのだった。

ヒルデと出会ったハンスはその喜びを、「全世界が再び新しく始まるのかもしれない」と書き記している。ヒルデはハンスの講義原稿の朗読にそれが「まるで愛の詩でもあるかのように」うっとり耳を傾ける。ところでハンスに出会った当時のインゲは彼に「首ったけ」であったし、「音楽と、映画と、演劇と、そして詩でさえも大好き」だった。そして「朗読に何時間でも耳を傾けてくれたものだった」とハンスは回想している。言い方を変えれば、ヒルデはハンスに出会った当時のインゲそのままなのだ。「全世界が…」と書いたあと、クリーニングを取りに行ってくれない、またインゲは自分をちっとも暖かい目で見てくれはしない、とハンスはインゲへの不満を記す。しかし不満があるのは期待があるからに他ならない。さすがに罪の意識を覚えてか、ハンスはその直後「確かに私の行動が乱暴だったのは認める。それに無神経だったかもしれない。しかし私のようなひどい家庭に育った男は教えてもらわなければ、うまく感情表現などできないものなのだ」(31)と言い訳している。ハンスの父は乱暴な人で、ハンスを箒の柄や革のベルトでしょっちゅう殴りつけ、また妻にもしばしば暴力をふるっていたという。「そんな父を嫌うのは当然のことではないか」(22)とハンスは子供時代を振り返る。

一方ハンスの心をとらえた若き恋人ヒルデの魅力とはどんなものなのか。優しさ、自分と精神的に似通っていること、共感を示してくれること、理解するのみならず称賛してくれることがハンスにもたらず官能的快樂。「ベンヤミンには肉体がない」と言われる一方で、彼の物事の把握の仕方そのものが、いわば極めて官能的であった。精神の動きが、決して不毛な抽象的な地平に陥る事

なく、常に豊かな身体性を備えていたと言ってもいい。この意味でもハンスの人物造形にはベンヤミンが色濃く影を落としている。またヒルデはハンスとファインシュタインと、そして多くのユダヤ人たちの、 Kommunismus に託した希望 — と失望 — を象徴的に表す人物でもあろう。その上ヒルデは、ベンヤミンの愛したソ連出身の共産主義者、アーシャ・ラツィスを思わせる人物でもある。ベンヤミンはラツィスをすぐれた知性の持ち主の素晴らしい女性だと言っている。ラツィスもまた強制収容所に送られ、第二次大戦後まで釈放されなかったのである。(野村 157)

4. 様々な境界線

第三部 — 1938年9月パリ。インゲの日記。ハンスの劇がパリで上演され、大成功を収めた。ハンスはオーストリアの友人たちの運命は気にならず、幸福に酔いしれる。「僕たちがトラブルに巻き込まれるのを避けるため」とへりくつをこねて、ハンスはヒルデに会い続ける。劇の成功に気をよくしたハンスは、それまで享乐的であったのだが、一転して書くことに専念するようになる。これとは逆にインゲは、自分がハンスの称賛を得たいがために懸命に働いて来たのだとはっきりと気づく。このころハンスはしばしばベンヤミンに会い、いろいろと影響を受ける。

インゲは、アメリカに渡った息子と二度と会えないかもしれないと思って嘆き悲しむが、ハンスはその悲しみを共有してはくれない。また不安にたえられず、インゲはヒルデを自宅に招く。話し合いの間、インゲは終始己の優位に自信を持っていた。しかし最後にヒルデに別れを告げるハンスの口調から二人が本当に親しい関係であることを感じ取り、ショックを受ける。その後ヒルデは共産党の命によりモスクワに帰らねばならないこととなる。またベンヤミンにささやかな額の金を貸してやったハンスは、代わりに「死のカプセル」(モルヒネ)を受け取るが、驚愕してすぐ返すというエピソードも語られる。

第四部はモスクワのヒルデからの手紙である。一応平和な生活らしいが、なぜかハンスからの手紙は一通も彼女の手元に届かないらしい。そのうち「もうハンスに会うな」と命令されたこと、またカートと会い、自分の住むフラットの空き部屋に移るよう勧めたことなどが語られる。

第五部は再び1983年のシドニーでのインゲとサウルとの会話である。その後ハンスはどうなったのか、と問うサウル。ヒルデはスパイ容疑で15年の刑。ヒルデからの手紙も来なくなり作品も出版されず、ハンスは不機嫌になり、インゲにつらく当たる。戦争が始まると逮捕され、しばらくたって釈放された時には人が変わったようになってしまう。それでもインゲはハンスを愛していた。やがてドイツ軍が侵攻してくると、さすがのハンスも逃げることに同意し、かくして逃避行が始まる。ある晩突然ハンスは正気に戻り、それからは車を調達してきたり、至って頼りになる。この夫婦の常で、インゲが元気をなくすとハンスが元気になるのだった。

1940年、ついにピレネーを越える。しかし彼らはスペイン側の国境の町で他の人々と共に足止めをくらい、翌日フランスに強制送還されることが知らされる。同じホテルに泊まっていたベンヤミンは疲れと絶望から死を選び、その知らせが翌朝人々の間を駆け抜ける。常にモルヒネを持ち歩いていたベンヤミンにとっては覚悟の自殺であった。ハンスはそのことを人々に語ってきかせるが、ハンスもまた動揺している。食べ物求めて出かけたインゲが戻って来ると、ハンスの様子がおかしい。ろくに口もきけず、紙に「カートが来た」と書き付ける。またハンスは高熱を出している。驚いたインゲが薬と水を取りに行き、戻ってみるとハンスの姿はかき消えてしまっている。半狂乱になって捜し回るインゲ。しかし彼の足跡は杳としてしれない。「これよりひどい苦痛は味わったことがない」と思うインゲ。しかしそれはまだ「最悪」ではなかったことをインゲは思い知らされる。ある日警官たちが顔のめちゃくちゃになった死体を彼女の部屋に運んで来て、「これがあなたの夫だ」と言ったのだ。服装とその手は明らかにハンスであった。それから40年以上の月日が経つ。しかしインゲにはいまだに信じられない。ハンスが今でもヨーロッパのどこかで生きているような気がしてしまうのだ。

また、インゲは自分が科学を文学より上と見なし、自分には人に認められる権利があると思い、そのくせハンスのしていることの価値は認めようとしなかったことに思い至る。さらに「大量虐殺の中では一人の男の死など取るに足りないもの」であること、そして「大切なのは人の、ではなく自分の人生を生き抜くこと」なのだと語る。そのことが分かっていなかったということについて

ハンスの許しをえなければならぬが、彼は死んでしまったのでその許しは永遠に得られない、だからハンスの精神に乾杯、そして我らのすべての不実への許しに乾杯、とインゲ。こうして第五部が終わる。

第六部のハンスの詩では、文明の崩壊、また「残酷な者は祝福されない」こと等が語られ、最後は「自分は使命を忘れるわけにはいかない」という言葉で終わっている。

ファインシュタインの小説では人々は政治の暴力を逃れ、沢山の国境を越える。ハリーナは母のはからいで、住み慣れたブダペストを後にイギリスに渡る。フリーダはベルリンからソ連へ、そしてシベリアを横断して最後はアメリカにたどり着く。『国境』ではベンヤミンが国境を越えそこなって足止めをくらい、ポル・ボウで死を選ぶ。同様にハンスもポル・ボウで殺される。そこまでで物語のほとんどは終わる。確実に国境を越えられたのはインゲだけだ。ベンヤミン同様ハンスも国境ならぬ、生と死の境を越えてしまったのである。ベンヤミンの死に寄せるブレヒトの哀悼の詩にも境界線が出てくる。

きみは、殺戮者のさきをこして

きみ自身に手をくだした、という。

八年の亡命のなかで、敵の栄達に眼をそそぎながら

ついに 越えてはならぬ境界にまで追いつめられ

越えうるもうひとつの境界を越えてしまった、と。

(中略)

こうして 未来は暗闇の中にあり、善の力は

まだ弱い。きみが見たのはその総体だった、

苦悩する肉体をきみが断ちきったとき。(ベンヤミン 231)

『国境』では境界線は実際の国境と、比喩としての境界線と、二つの意味をもつ。ユダヤ人とナチス・ドイツ、敵と味方、国家と個人、狂気と正気、詩と真実、科学と文学、老人と若者、精神と肉体、善と悪、女と男、死んだ者と生きている者。「死者と生者。何がその二者を分けたのだろうか？」とインゲは自

問する。

境界線で二つに分けられるこれら様々な一対は、しかし常にきっぱりと分けられるものだろうか。例えば差別するものと差別されるものは、そんなに截然と区別出来るのだろうか。差別の根—あるいは芽—は、人を抑圧する力は、ファシズムの可能性は、この「私」の中にも粉れもなく潜んでいるのではないだろうか。政治のレベルでも個人生活でも、暴力なき世界への第一歩、ささやかな希望の光とは、この私の内なる暴力的な力、悪の可能性の認識のことではないだろうか。

5. 語ること、そして希望

後に残されたインゲの役割は死者＝ハンスへの喪に服することであり、ハンスの物語を語ることである。第一部の扉辞にもあるように、物語ることは心をやすことでもある。たとえば愛する家族を突然事故などで亡くしたとき、人はなかなかその事実を受け入れることが難しい。そんなときには「この人の死因を脳挫傷です」などという科学的な知識ではなく、なぜその人がそこで死ななければならなかったのかという物語をこそ、悲しみに沈む家族は求めるものなのである。こうして「語る」ことによって人は混沌として受け入れがたい現実を一本の糸でつないで行く。そうする過程で、その語る人の心はいやされて行くという。⁴

また死者の物語を語ることは、ベンヤミンの歴史認識から見ても、未来への希望につながって行く道なのである。死者への喪に服すること、物語りを語ることを未来への希望につなげていくこと。『境界線』でファインシュタインの用いている語りは、この点において大いに意味を持つこととなる。ハンス、インゲ、ヒルデの各々に直接自分の言葉で語らせることによって、『母の娘』のようにヒロインの一人称の語りに終始する場合に比べ、読者がインゲのみならずハンスやヒルデにも感情移入することが容易になっている。ことにこの小説の主要部分の最初（第二部）が、インゲではなくハンスの日記によって始まっているため、読者はまずハンスの視点から世界を見る。ハンスにとってインゲがどのような存在であるのか、インゲに冷たくされることでハンスの心がいかに傷ついているのか、またヒルデとの出会いが彼にとっていかに救いとなった

のか、等々を我々はつぶさに知らされることとなるのである。続く第三部はインゲの日記からなる。今度はインゲの側から見た世界が鮮やかな手触りを持って我々に示される。ハンスとのすれ違い、またハンスのアバンチュールによって彼女がいかに傷ついているか。作者はハンスとインゲのどちらもにも加担していないし、どちらも断罪してはいない。作者の共感は両方にほぼ等分に向けられている。このことは大変重要である。というのも、作者の共感がこの二人に等分に向けられ、かつ作者がこの二人からほぼ同じだけの距離を保っていることが、いくつかの大きな効果を生んでいるからだ。その一つは、第三の主要人物であるヒルデの運命への読者の共感が可能となっていることである。更に意味の深いことは、第五部 — インゲとサウルの会話 — 中で後日譚として語られるハンスの死が、インゲのみならず読むものにも大きな衝撃を与えていくこと、また結果としてハンスの死へのインゲの悲しみも極めて切実に感じられることだ。かくして『境界線』は比較的短い小説であるにもかかわらず、非常な深みと重厚さを備えたものとなっている。またこの三人の日記と手紙をはさむ、インゲとサウルの会話にも大いに意味がある。オクスフォードで歴史を学ぶサウルがハンスやインゲの日記、そしてヒルデの手紙を見ることは、ベンヤミンの言う意味での「歴史認識」の第一歩にほかならないのである。なぜなら「歴史の中の死者の叫び — それも勝者でなく敗者の — を聴く能力をもつこと。可能性を出さずに死んだもの／出来事／事物たちへの哀悼の作業、喪に服することこそ、まずは歴史認識の努め」（今村 124）であるからである。

このように、歴史の中の死者 — それも敗者 — の叫びを聴くことで、人間の上にもささやかな希望の光がさすこととなる。つまり死者の叫びに耳を傾け、敗者への喪に服することこそは、暴力なき世界、支配なき世界の実現へ向けてのささやかな前進だからである。ベンヤミンの暴力論によれば「一切の既存のシステムや制度を越えた境地に立ってはじめて、…暴力なき世界関係を瞥見すること」（今村 128-129）ができる。男女関係についても同様のことが言えるであろう。ここでも人は境界線を越えることとなるのである。

ベンヤミンの歴史認識によれば歴史の「いま」とは、「かつてありえた」輝かしい時間から現にあるこの世界に向かって、とりかえしのつかない転落の道を辿りつつあると同時に、最後の破局の瞬間に救いへと反転させうる救済の力

をも秘めているものなのである。(高橋 58-59)

このように歴史の「いま」は転落の道を辿りつつも、救済の契機を秘めている。それと同様に「ファシズムの温床には境界はない」が、同時にまた「平和と自由の夢もあらゆるところに生きている」(フィットコ 353)のだ。ここでもインゲとサウルの会話は大きな意味をはらむこととなる。境界を越えた別の場所で、平和と自由の夢のために、若い世代に昔日のことを語り聴かせる、それがインゲのしていることであるからだ。「私を幸せにしてくれるもの」は「季節の移ろい、家族の存在」等至って瑣末で日常的なことなのである。ただし「こういうものを見ていられる心の平和がある限り」(『ブレヒトを愛して』)という条件付きであるが。そしてその心の平安を支えるものは政治のレベルでは暴力なき世界実現に向けての我々の強い意志と不断の努力なのである。そして個人のレベルでは愛情嗜癖や共依存的な精神状態を克服した心、自己肯定感に支えられた成熟した精神、生き生きした精神をもつことである。

先に引用した斎藤学の共依存についての説明には続きがある。そこでは共依存とは正反対の、真の愛情、親密な人間関係のあり方が述べられている。

親密な人間関係とは、このような不安と支配欲から解脱した関係である。それは流動的なプロセス(過程)であって、共依存のように恒常性を持った状態ではない。…自分の感情に誠実であるということは、「寂しさ」という苦痛についても敏感であるということで、そのような人は常に親密な関係を求めている。求めているが、それによって相手や自分を支配・拘束する必要を感じていないので、相手に退屈すれば離れるし、自分から離れた相手を恨むこともしない。こうした人の根底にあるのは自己肯定の感覚で、これが彼らに「生き生きした感情生活」を与え、「シラフの(物質や愛情に耽溺しない)生活」そのものを楽しむ能力をもたらす。(斎藤 199)

自己肯定感に裏打ちされた精神には生き生きした感情生活が可能となり、物質や愛情に耽溺しない、しらふの生活そのものを楽しむことが出来るようになる。季節の移ろい、家族の団欒、「コーヒーの香り、熱いクロワッサンに溶け

るバターの匂い。木々の美しさ。」(62)

インゲ自身も言っているように、「大切なのは人ではなく、自分自身の人生を生き抜くこと」である。他人に存在感を依存する生き方は、その当の相手を大切にしているように見えて、実は手段にしているに過ぎない。健全な自己肯定感を持つと共に、自分自身の中にファシズムのきざしや他人を抑圧する力、残酷さなどが存在することを冷静に認識すること、また個人同士の関係のうち、歴史や社会全体の動きにもあてはまるパターンと同じものが存在することを認識することが肝要である。それが人類の明日への希望の道であり、そして女が自由な生を生きられる明日へと我々を導く手立てでもあろう。

インゲはフレデリックにこそ会えなかったが、その息子サウルには会うことができた。そして二人は年齢、国籍、性別等様々な違い(境界)を越えて心を通わせる。生き残ったインゲは死者ハンスのことを語り、彼に思いを馳せる。そして本書の最後はハンスの詩で終わっているのである。このことは作者ファインシュタインの「詩の力、文学の力は今でも生きている」という思いを表現していると解釈出来るだろう。それがハンスの詩の末尾の「使命」の意味に違いない。まこと、故郷はつねに「いま、ここ」でありうるわけだし、「平和と自由の夢もあらゆるところに生きている」(フィットコ 353)なのであるから。

註

1. この小論は作品の紹介を主な目的とするものである。使用テキストは Elaine Feinstein の *The Border* (New York: Marion Royars Publishers Inc., 1984: 1985)、*Mother's Girl* (London: Hutchinson Ltd, 1988)、そして *Loving Brecht* (London: Sceptre, 1992; 1993) である。なお引用頁は文中の () 内に数字で示した。
2. リーザ・フィットコは、フランス敗戦によってナチスドイツからの政治亡命者が困難な状況におかれた1940-1941年にかけて、多数の亡命者を案内してスペインに入国させた。ピレネー山脈を越える間道である。そして奇しくもリーザが最初にこのルートを通ったときに案内した三人のうちの一人がベンヤミンであった。彼はボル・ボウで足止めを食い、フランスに送還される見通しの前に、疲れ果てて命を断った。皮肉なことには、この事実衝撃を受けたスペイン当局は、ベンヤミンと共にピレネー越えをしたギュルラン母子の出発を許したという。あとにはベンヤミンが命よりも大切にし

ていた新しい原稿の入った黒い鞆だけが残された。フィットコは原稿は無事だったと信じていた。その原稿がなくなってしまった事実をフィットコが知ったのはかれこれ40年も後のことであった。原稿はついに見つからず、黒い革鞆だけが当時の死亡者記録に記載されていたという。「内容不明の文書入り」と備考がついて。

フィットコはベンヤミンの死について次のように書いている。「ポルト・ボウでベンヤミンの前に〈せむしのこびと〉がふたたび現れたにちがいない。かれだけの、ベンヤミンの〈せむしのこびと〉が——そしてかれの流儀で決着をつけなくてはならなかったのだ」と。〈せむしのこびと〉とは何をしようとしても先回りしていてぶち壊してしまう、童謡の登場人物で、ベンヤミンはじぶんのせむしのこびととは自分の不器用のことであり、つねにわれわれを見つめ、人が死ぬときにその目の前を走り去るものだ、と書いている。「生とは、こびとがみたわれわれの姿だと思う」とベンヤミンは書いている。フィットコ参照。

3. いわゆる共依存については、これを「女の病というのは男性中心の自立の考え方」という批判もあることを付け加えておこう。井上摩耶子によれば、自立と依存（ないし共同性）は、対立しあうものではない。成熟した大人にとって両方とも必要なのである。自立していなければ安んじて人に依存することもできない。たとえばいわゆる「自立」した男は人の話を聞いていなかったりするわけで、精神的成熟には「見られる自己」、つまり受動的な自己の認識も不可欠なのである。この見られる自己の認識を欠いている人は、自閉症となってしまうのである。「フェミニストカウンセリング理論化の試み——『自立』と『依存』概念を越えて——」『第二回フェミニストカウンセリング全国大会報告集』日本フェミニストカウンセリング研究連絡会、1995。
4. 柳田邦男「体験と物語」日本ユングクラブ東京講演会 1996年 6月9日、及び柳田邦男『犠牲 サクリファイス』文芸春秋社、1995年、220-221。

引証資料

Feinstein, Elaine. *The Border*. New York: Marion Boyars Publishers Inc., 1984; 1985.

_____. *Mother's Girl*. London: Hutchinson Ltd, 1988.

_____. *Loving Brecht*. London: Sceptre, 1992; 1993.

井上摩耶子「フェミニストカウンセリング理論化の試み——『自立』と『依存』概念を越えて——」『第二回フェミニストカウンセリング全国大会報告集』日本フェミニスト

- カウンセリング研究連絡会、1995。
- 今村仁司『ベンヤミンの問い』講談社 1995年。
- 斎藤学『「家族」という名の孤独』講談社 1995年。
- 高橋順一『ヴァルター・ベンヤミン』講談社 1991年。
- 野村修『ベンヤミンの生涯』平凡社 1993年。
- フィットコ、リーザ『ベンヤミンの黒い鞆 — 亡命の記録』野村美紀子訳 晶文社 1993年。
- ベンヤミン、ヴァルター『ブレヒト』ヴァルター・ベンヤミン著作集9 石黒英男 編集解説 晶文社 1994年。
- 村瀬興雄 編『ファシズムと第二次世界大戦』世界の歴史15 中央公論社 1982年。
- 柳田邦男『犠牲 サクリファイス』文芸春秋社 1995年。
- 同「体験と物語」日本ユングクラブ東京講演会 1996年 6月9日。
- 『平凡社大百科事典』